

中部の

エネルギーを 築いた

人々

東三電気株式会社の設立者
牧野文齋

東三河の新城市八束穂（やつかほ）に設楽原歴史資料館がある。この資料館は、この地に1575（天正3）年に3,000丁の火縄銃を持った織田・徳川連合軍と騎馬隊の武田軍が戦った「長篠設楽原の戦い」にまつわる歴史が展示されており、通称信玄とも呼ばれていた。また、この一帯は牧野文齋記念公園で信玄病院跡地の顕彰碑がある。

今月号は、この地で生まれ信玄病院経営の傍ら東三電気（株）をはじめ、牧野図書館、劇場の花菱座など各種事業に直接、間接的に経営手腕を発揮し、長篠古戦場顕彰会の創立など地元の発展に貢献した牧野文齋を紹介する。



牧野文齋
〔1868（明治元）～1933（昭和8）〕

生い立ちから東三電気（株）の設立

牧野文齋は1868（明治元）年に信玄病院2代目院長牧野謙作の長男として生まれた。1887（明治20）年に医術開業試験に合格、東京で医術を修業した後の1891年に信玄病院3代目院長になった。

信玄病院は東三河地方の唯一の総合病院として高く評価され、最盛期には看護婦100名余、3つの病棟には100～200人位の入院患者がいたようである。

（1）新城瓦斯（株）から東三電気（株）

1911（明治44）年に新城瓦斯（資本金：2万円）が設立され、地元の新城町および隣接している東郷村に供給していた。牧野文齋はガス灯、熱源用やガス機関用のガス供給経営事業の傍ら、電気事業に着目し、当時、豊橋電気（株）社長の福沢桃介と交渉し、1917（大正6）年に見代発電所及びその送電系統の電気工作物並びに供給権全てを22万円で譲り受け電

気事業を兼業、社名を東三電気瓦斯（株）と改称した。そして本社を自宅の東郷村八束穂に移転し、翌年、ガス事業を廃止して、社名を東三電気（株）と改称した。

取締役社長に牧野文齋、常務取締役に実弟の熊太郎が就任した。供給区域は1町10力村（南設楽郡の新城町、東郷村、千郷村、作手村の一部、八名郡の八名村、橋尾村、豊津村、金沢村、加茂村、石巻村、宝飯郡の一宮村）の約1,500世帯で、10年後には11,000世帯と順調に発展していった。

また、1921（大正10）年に八束穂地内に工場があった三河陶器を合併、資本金を30万円にした。この会社は一般陶器類、および電気配線用碍子などを製造販売する会社で、以後すべて自社で使用する配電線及び屋内配線に使用する碍子類を賄った。

さらに翌年、水力発電所予備の火力発電所

として千郷火力発電所(出力：125kW)を建設したが、稼働率も悪く、1928(昭和3)年に廃止した。

(2) 遠三電気と渋川電灯所を買収合併

1926(大正15)年、東三電気は遠三電気と渋川電灯所を買収合併した。この買収合併の財源として40万円を増資し、資本金70万円となった。増資に当たり東邦電力と提携し新株式金額を同社が引き受け、また、取締役2名が就任することになり東邦電力の傘下に入ることとなった。

① 遠三電気株式会社

遠三電気は1916(大正5)年に静岡県磐田郡浦川村に開業した小規模電気事業者で、3村(浦川村、佐久間村、山香村)と2か所の工場に供給した。電源は三香村の鳴瀬沢発電所(出力：37kW)と山香村の河内川発電所(出力：50kW)であった。

② 渋川電灯所

渋川電灯所は静岡県引佐郡新鎮玉村渋川に事務所があり、渋川一帯へ供給する個人経営の小規模電灯供給所であった。「引佐郡史」に「渋川電灯所は渋川木材株式会社工場内にあり、直流100V15A発電機1台を備付け、原動力に製板蒸気機関及び水力を並ず、点灯数120灯あり」と記されている。その後、需要が増加したので遠三電気から受電し、大正15年の合併時には需要家数383戸、923灯になっていた。

(3) 三河水力電気(株)の設立と東三電気を合併

三河水力電気株式会社(資本金：100万円)

は東邦電力と名古屋財界が協力して1924(大正13)年に設立された会社である。社長は名古屋財界重鎮の神野金之助が就任した。ただし株式については東邦電力ではなく早川電力が引き受けた。(当初は山梨県を流れる早川で電源開発した電力を静岡県及び横浜・東京方面への供給を目的として設立された会社で、1925(大正14)年に群馬電力と合併し東京電力が設立され、電力戦国時代に入った。これ以降、東邦電力系の東京電力と従来の東京電灯が東京を舞台に需要家争奪戦を繰り返したが1928(昭和3)年に両社は合併した。——なお、電力戦の詳細については別の機会に譲り、また、ここでの東京電力は1951(昭和26)年に発足した現在の東京電力とは異なるので注意されたい)

このように、当初、三河水力電気は東京電灯と東京電力の首都圏電力争奪戦のための電源増強としての電力卸の発電会社で、1927(昭和2)年、矢作川に越戸発電所(出力：7,500kW)の建設に着手、昭和4年に完工、運転を開始した。しかし電力戦の終結により東邦電力としては一般電気供給事業を持つことになり、昭和3年に東三電気(株)を合併し電気供給事業を開始した。そして越戸発電所からの電力は名古屋、岡崎方面へ送電された。

これにより東三電気は解散、牧野社長は三河水力電気の取締役役に就任、東郷村にあった本社は新城町中心部にあった新城銀行跡に移転し、三河水力電気(株)新城営業所として営業を開始した。

(参考) 東三電気㈱解散時の発電所は次の通りである。

東三電気㈱解散時の発電所

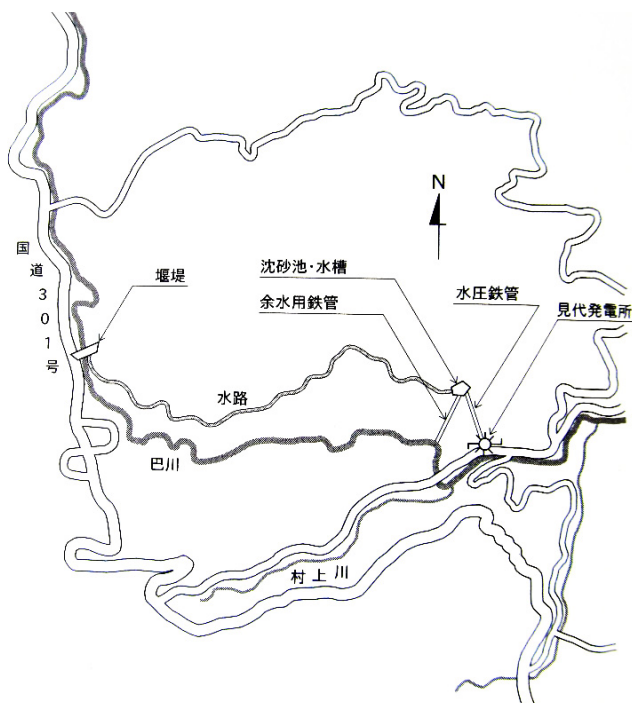
発電所名	出力(kW)	所在地	運転期間
見代水力発電所	360	愛知県南設楽郡作手村保永	1908(明治41)~1959(昭和34)
河内川水力発電所	50	静岡県磐田郡浦川村浦川	1920(大正9)~1954(昭和29)
鳴瀬沢水力発電所	37	静岡県磐田郡山香村戸口	1916(大正5)~1939(昭和14)

なお、見代発電所は、豊橋電気㈱が豊川水系巴川の作手村に1906(明治39)年に着工、2年後の明治41年に送電を開始した。設計者は日本のエジソンと言われた藤岡市助で、落差110mの水路式発電所で、水路延長は2,439m、米国ウエスチング・ハウス社製の3相交流発電機2台、総出力360kWであったが水量不足で渇水時には200kWと予定電力を発電できなかった。なお、同発電所は中部電力に引き継がれたが水路の老朽化などにより1959(昭和34)年に廃止された。発電設



見代発電所建屋(出典：三遠南信産業遺産)

備は撤去されたが建屋は製茶工場として使われている。



見代発電所水路図(出典：三遠南信産業遺産)

私立牧野図書館と長篠古戦場顕彰会

(1) 私立牧野図書館の開館

牧野図書館は、1915(大正4)年に大正天皇の即位を記念して信玄病院の一面に独力で開館した。図書館は縦横各6間の2階建て洋風建築の書庫と、同規模の閲覧室があり、事務員2名が配置され、図書も無料で貸し出しが行われ、売店もあった。

図書館には、20,000冊を超える蔵書があったが、諸般の事情で1937(昭和12)年に閉館された。そして、建設予定の町立図書館へ13,000余冊が寄贈され、現在、新城市図書館に牧野文庫として収蔵されている。

(2) 長篠古戦場顕彰会の設立

1915(大正4)年に長篠古戦場顕彰会設立総会を同氏が経営していた花菱座で開催し発足させた。そして長篠の戦における戦没者供養などの祭礼、戦跡案内碑、13人の武田将兵墓碑などを建てた。設楽原古戦場いろはカルタに「そこかしこ 顕彰碑たてし 牧野文斎」と読まれている。また、長篠戦史考(全1冊)、設楽史要(全9冊)、戦国時代史論(15冊)など多くの著書を残した。このように、牧野文斎は郷土史などの資料収集とともに長篠の戦に関する研究に尽力した。

なお、郷土の発展のために大きな役割を果たした略歴は次の通りである。

牧野文斎の略歴

西暦	和暦	履 歴
1968	明治元	牧野謙作(信玄病院2代目院長)の長男として現新城市八束穂(やつがほ)で生まれる
1887	明治20	医術開業試験に合格
1891	明治24	信玄病院3代目院長を継ぐ
1911	明治44	東三電気(株)の前身、新城瓦斯(株)設立
1913	大正2	劇場の花菱座を1921年まで経営
1915	大正4	私立牧野図書館を病院の一面に開館 長篠古戦場顕彰会設立総会を花菱座で開催
1917	大正6	東三電気瓦斯(株)を改称し東三電気(株)設立、牧野文斎が社長に就任
1921	大正10	三河陶器(株)を合併
1926	大正15	遠三電気(株)と渋川電灯所を合併
1928	昭和3	三河水力電気(株)が東三電気を合併、三河水力電気の取締役役に就任
1937	昭和12	図書館閉館、蔵書13,000余冊を新城市に寄贈
1933	昭和8	死去

(寺澤 安正)